

『怪談名香富貴玉』

—怪談小説の長篇化—

古いことであるが、『徳川文芸類聚』の「怪談小説」の例言で、朝倉無声氏の識されたところによれば、中国の怪異小説の影響をうけて発生したのが近世の怪異小説のその後は、「御伽婢子」の模倣がつづき、他方では、「百物語」の追従作が続出しながら、この二系を併せて新案を出したのが、『英草紙』（寛延二年）であったとされる。

近世の怪異小説の発展と系譜を問題とするかぎりこの説は、いままなお依然として尊重されなければならない。（注し『英草紙』を評価すればそれだけその斯界における史的意義は高まるだけで『英草紙』以後の怪異小説は、これに追従する諸作のかげにかくれて埋没してしまつたかの感さえるのである。たしかに『英草紙』に倣つて「古今奇談」また「古今怪談」などと角書きする、いわゆる初期読本の怪異小説の盛行はそれを認めて余りあるところである。

しかし、その間に無声氏のいう御伽婢子、百物語系の怪異小説も依然として人気を持ちつつづけていたのも確かであつて、そうしたの怪異小説の流行と並行して『怪談』と単に「怪談」を名告る怪異小説のかす／＼も流行していたのである。寛延あたりから寛政期に至る約半世紀のその種の怪異小説の出版を一覧するなら

太刀川 清

寛延二年	古今奇談英草紙	五	都賀庭鐘
三年			
宝暦五年	古今奇談茅屋夜話	五	隠几子
明和三年	古今奇談繁野話	五	都賀庭鐘
四年			
	怪談登志男	五	静話房
	怪談実録	五	紀常因
	怪談楸杵	五	静観房好阿

五年	七年席上奇観垣根草	五	草官散人
	（一名古今奇談垣根草）		
九年	安永元年		
二年	五年今古怪談雨月物語	五	上田秋成
七年	今古奇談翁草	五	伊丹椿園
	今古奇談清談	五	随山
九年	天明元年今古小説唐錦	四	伊丹椿園
	二年今古怪談深山草	四	伊丹椿園
	三年今古奇談怪異夜話	五	清涼井藤采
	今古奇談閑栖劇話	五	東随舎
五年	六年今古怪談深雪草	五	神藤子
	（一名を怪談御伽話）		
			（諸州奇事談の改題本）
	怪談とのみ袋	五	大江文坡
	怪談笈日記	五	大江文坡
	怪談御伽猿	五	大江文坡
	怪談国土産	五	禿箒木
	怪談三柄絵	五	茶話堂
	怪談御伽童	五	静観房好阿
	怪談記野狐名玉	五	谷川翠生系
	怪談重問薺種	五	琴紫
	（金集談の改題本）		
	怪談見聞実記	五	中西如環
	怪談仙界境	六	
	（新御伽婢子の改題本）		
	怪談浅間ヶ嶽	五	
	（怪談都草紙の改題本）		

寛政二年	古今奇談秀句冊 五	都賀庭鐘	怪談前席夜話 五	文栄堂
二年	古今奇談紫草紙 五	白鹿堂	怪談旅硯 五	紅葉園主人
五年	古今奇談四方義草 五	其窓子		
八年			怪談旅の曙 四	波天奈志小浮弥
九年	古今奇談毒草紙 五	閑外逸民	怪談夜半鐘 四	耳学斎
	(怪異談叢の改題本)		怪談陌草紙 五	源温故
十年	古今怪談西曝物語 五	(東曙双紙の改題本)	怪談東雲草紙 五	東山仙人
			怪談雨の燈 五	玉香山人
十二年	古今奇談警世通語 五	鈴木故道	怪談弁妄録 五	桃溪山人
	(東曙双紙の改題本)		怪談破几帳 五	流霞窓主人
十三年	古今奇談旅行集話 五	水月堂	怪談藻塩草 五	速水春暁斎
享和三年	古今奇談種捨草 六	山家人広住	怪談雨夜鐘 五	十返舎一九
文化元年	古今奇談一閑人 五	生々瑞馬		
二年	古今奇談聞書雨夜友 五	東随舎		
	今古奇談 五	煙波山人		

並べたところでこれを概観するなら、『英草紙』に追従する「古今奇談」と角書きするものは明和期には『繁野話』それにこれに類する『垣根草』の二作、「怪談」と付すものが圧倒的に多い。ただし文坡(注②)や好阿(注③)の活躍は、多く旧作に頼っているものである。安永期に入ってもこの傾向はつづくが「雨月物語」あたりを境いとして逆転し、天明期に入ると椿園の活躍もあって「古今奇談」の類が優勢になる。寛政期には両者伯仲し、そして「怪談」は享和三年「怪談雨夜鐘」あたりが最後となるるか。「古今奇談」はさらに後、文化二年の『古今奇談』をもって終熄し、かわって「復讐奇談」なる角書きが優勢となる。

さらにこれを作者の側からみるなら、前者では都賀庭鐘、上田秋成、伊丹椿園等の活躍が天明期まで、後者は静観房好阿、大江文坡、谷川琴生系などが安永のはじめまで活躍する。そして寛政以後は一人一作の怪異小説の著作活動が目につく。寛政期はいうまでもなく後期読本あるいは江戸の読本の萌芽期である。天明

末年庭鐘の『秀句冊』あたりを最後に怪異小説も無名作家の活躍期ということになるか。それとも「古今奇談」も「怪談」もない混沌とした終末期というべきであらうか。その間に京伝の『通俗大聖伝』は寛政二年、馬琴の『高尾船字文』は同じく八年に出た。『秀句冊』を刊行する庭鐘の動きを最後に読本界も大きく変わろうとしていたのである。

二

さて、両者の対照は「古今奇談」の「古今」を外にすれば「奇談」と「怪談」の別となる。「奇談」の語は古くからあったであろうが書名として用いた古い例は寡聞にして知らない。これに「古今」と冠して「古今奇談」と言ったのは『英草紙』に始まるのは周知のところで、「今古奇観」に因むこの角書きはやがて内容にかかわりなく恰もそれが高踏的で知識的の意味をもつかの印象を強めてひとつの流行を作ったのは一覽しての通りである。

「怪談」と冠す怪異小説は従来なかったわけではない『怪談全書』(元禄十一年)、『怪談乗合船』(享保十一年)等を見かけることはあっても数多い怪異小説から見れば極くわずかである。それが明和期あたりから急激に出廻るのは「古今奇談」と角書きするものの流行と無縁ではなさそうである。かれが知識的な高踏的なものなら、これは通俗的な大衆性をもって任じていたかのように多分に意識的である。

「奇談」と「怪談」の別を意識しながらもその奇の字義と怪の字義を本来にまで遡って推究する必要もなからうと言われたのは山口剛氏である。

妖怪と変化、幽霊と怪物を早い頃から混同するやうに、古くは怪談と奇談の別を樹ててゐなかつた。たとへば雨月物語である。あれは怪談に属するか奇談に属するかといえ二つの種類が混っているからといえはそれまでであるが作者在世の当時の広告には「古今怪談」とも「古今奇談」とも冠せられていたのである。少なくとも「雨月物語」前後は奇談も怪異談もけぢめはなかつた。

と、名著全集の「怪談名作集」で解説されるところである。

しかし先述の出版状況を見るなら、けじめなしとは一概に言い切れそうにもない。私は寡聞にして『雨月物語』が「古今奇談」と角書きした例を知らない。件の野村梅村合刻の安永五年版の初巻扉見返しに「今古怪談」とある。また別に巻末に「雨月物がたり今古怪談 全五冊」と識す蔵書目録の付されたもの、それに

『諸人一代道中図之解』（明和八年正月刊）の奥付蔵版目録には「剪枝山人著雨月物がたり 怪談全五冊近日出来」の広告があったりして、見るかぎりでは『雨月物語』には「怪談」と付されている。『雨月物語』はやはり怪談ではなかったか。それに「今古」を冠せることによつて、また『英草紙』や『繁野話』に追従しようとする。その意味で『雨月物語』の「今古怪談」なる角書きは、「怪談」の通俗性をもちながらなお高踏的な知識性を備えたということとまさに時流に叶つたものであつたといふべきである。

三

「古今奇談」と角書きする高踏的な小説が流行する中で「怪談」と名告つて従来の通俗的な怪異小説をなすにはそれなりの認識と努力が必要であつた。ちなみに「怪談記野狐名玉」（安永元年）の作者は「怪談」を著すためにまず「乍憚口上」と識した口上書をもつて一言した。

此書者古今より品々の百物語怪談のよみ本多く御座候得共其外々の珍敷事不思議あやしきことを聞したかひしからずの書集草稿の中より撰出して五巻の草紙に合し候へども何か山川の主咄も古めかしくおほしめしさふらわんやと案じわづらひ、亦是春夏秋冬のお伽懃にもならんかと存たてまつりしかこつて思案にあたはずといひ伝へし古人の教にまかせ聞と、めしあらましを怪談記野狐名玉と評しひらかな絵入全部五冊と興行なる彼書林の乞に任す又は何某とせしめ近代の事多ければ世間をはかり名をあらはさずおのゝよく聞侍ひ給へ

芝居の口上を真似るなど通俗趣味に徹したといふべきで、そのいうところは、これが従来の百物語怪談集であり、お伽の書としての内容のものであることを案しながらも、なお「思案にあたはず」という古人の教えにまかせて敢て興行（出版）に及ぶといふのである。芝居もどきの口上書を序にかえてするなどその工夫と努力のあとを窺うことが出来ようといふものである。

さてそういう作者は谷川琴生系である。この人を伊勢の国学者谷川士清の匿名であるとする説がある。（注4）士は琴と同音、生系は練らぬ糸をスガと称する故に併せてコトスガと訓むというのがその理由であるが俄かに従え難い。かの『和訓栞』の草稿を同郷の本居宣長に送つてゐるころ（明和八年）の士清がそうした筆の戯れをしようか。しかも奥に「細工人作者谷川琴生系」とあるのも氣になる。細工人とは彫工である。士清は自ら作り自ら彫つての出版を果たしたのであ

ろうか。その戯れのほどがはかり知り難い。ちなみに「享保以後大坂出版書籍目録」につけば、

作者 和泉屋幸右衛門 津村東之町
板元 升屋彦太郎 木挽町北之町

とあり、作者和泉屋は『怪談記野狐名玉』の刊記にある版元の一人である。註5 この和泉屋幸右衛門は谷川琴生系とどう係わるのであろうか。その辺は查として不明である。

さてまた翌年、安永二年刊の『怪談名香富貴玉』の作者浪斎琴紫も谷川琴生系と同一人物かと思われる。二作が関係あることは『怪談名香富貴玉』巻四「稻村新蔵弘師を討取事」で明かであるが、この篇は目録で「并に名香富貴玉の由来」と付す。その部分を摘出するなら、

取出すにしきの袋のうちひかりかやく名玉一つコレへ日本には白狐のたま唐土にては野狐の玉、此ぎよくを所持せしところみなとみさかゆるゆへ其後これを富貴の玉と王宮より位を給わりし此名玉、是を私が祖父さま五色の名香をそへわれにあたへ給はりし

「白狐の玉」は中国では「野狐の玉」のち「富貴の玉」と言われた。これを怪異小説の名にしてその第一作を『怪談記野狐名玉』（以下単に『野狐名玉』という）、第二作を『怪談名香富貴玉』（以下単に『名香富貴玉』という）と名づけたのである。その「野狐の玉」とは「野狐名玉」の序に

夫野狐の珠暗夜投之、人剣を抜て怪ふ、是尋常の光りにあらざれば、必願此編て亦後しり彼怪談中、尤き者撰み一視之、者誰か又怪ざらんや、然則唯五尺の童、慰之耳にあらず千載ノ上院瞻、聲令視之、豈無鬼神論を著さんや宜平夜光、題しをや刻成余喜んで冠其序

次作『名香富貴玉』の琴紫の序もまたこれに倣つたものである。

むかし趙氏の珠を秦の十五城にかへんといわれしも、暗夜に投すれば人剣を按してあやしむも、又面光不背玉は何かたより拝みても玉中に釈迦像ましますと、是も怪し、今此名香富貴玉をひらき見るに海内のあらゆる怪しき話をあつめたるもめでたき春のしるしならずやと云爾

かくして『名香富貴玉』は『野狐玉』の姉妹篇であることは歴然としてゐる。

さらにまた、二作の柱刻を見ると、

怪談記野狐名玉 怪談名香富貴玉

怪談記 一 怪談 一

怪談記 二

怪談記 卷二

怪談記 三

怪談記 卷三

怪談記 四

怪談記 卷四

怪談記 五

怪談記 卷五

『野狐名玉』は「怪談記」と統一されるが『名香富貴玉』では卷二、卷三、卷五が「怪談記」とあるのは『野狐名玉』と同一であり、「怪談」と柱刻するのは卷一と卷四である。しかも『名香富貴玉』の卷五の末尾には「怪談記野狐名玉巻五終」と誤ったりする杜撰さが目立ちもする。これによってみれば卷一と卷四だけが『怪談名香富貴玉』のために作られたものであるらしい。

四

なんの変哲もなさそうな琴生糸の二つの「怪談」を問題にするのは、この卷一、卷四の創作に「怪談」の今後にかける方向が見られはしまいかと考えるからである。まず各巻に収められた話数をみると、

怪談記野狐名玉

怪談名香富貴玉

卷一 四話

卷一 四話

卷二 六話

卷二 三話

卷三 四話

卷三 四話

卷四 七話

卷四 二話

卷五 五話

卷五 四話

気づくところで「怪談名香富貴玉」では概して話数が少ないこと、それも卷四では二話と少ない。そしてその二話は「白髪町辺にて化生の事」と先述の「稲村新蔵弘師を討取事」であるが、卷四の全十六丁のうち前者は、若い女の首が火の中よりあらわれたという話でこれがわずか半丁足らずの長さ。後者は十五丁半に及ぶ長篇で、一巻はほぼこの話で占められているのである。

大体、『怪談野狐名玉』の口上書で「何か山川の主川の主」というところで狐狸の怪から幽霊・天狗等々と手を変え品を変えての短篇の怪談である。そして次作『怪談名香富貴玉』も同様の傾向にある。新作と思われる巻一についてみれば、第一話「甲州山家妖怪有し事」は『怪談実録』（明和二年）の「古城の怪異」と同類、第三話「江州竹島寺僧幽霊の事」は『諸国百物語』（延宝五年）の卷三「ぶんごの圃西迎寺の長老金に熱心をのこす事」、第四話「江州の百姓一子を失う」は『諸国奇事談』（寛延三年）卷三「江州の貧夫」と同類であったという指

摘だけでもその旧態ぶりが窺われ、通行の説話をもってする態度は安易である。そうした中においてこの「稲村新蔵弘師を討取事」だけは異質であって、『名香富貴玉』はまさにこの一篇のために作られ、出版されたかの思いをこめて書かれたのである。

五

稲村新蔵は野田の十六洲のあたりで弘師という山伏に無体の恋慕に苦しんでいる娘を救うが、新蔵に斬られて弘師は恨みながら死んで行く。その恨みは「弘師の火」といっていまでも現われるというのである。

さて、その娘は春日野と言って十六洲の主の蛇であった。春日野はかね／＼新蔵に魅入って取り殺そうとしていたところを逆に新蔵に救われることになってしまったが、いまだはこの恩を返さなければならぬと思っている。

一方、新蔵は野里の某の娘お里を妻に迎えることになるが、実はこのお里、これより前春日野の妹かまが洲にすむまこもの前に殺されていたのである。そこで春日野は報恩のためお里になり替って新蔵の許にやって来る二人の間には子供が出来る。ところが春日野は八百万の神に追われて新蔵から去らなければならなくなったが、子供をこの儘見捨てるのが悲しく、その苦衷を障子に書き記して去ろうとすると、春日野と同じすがたかたちをした女に出会う。この女は狐藤という狐で、これも新蔵に子供を助けてもらったことがあって恩返しにやって来たのであった。春日野は自分とそっくりの狐藤に子供を託して去る。

その後、狐藤は新蔵にこのいきさつを話すと、新蔵は春日野の貞節と恩義の厚さ感激しながらも、あるいは子供が蛇ではあるまいかと案じたがその心配もなかった。そこで新蔵は狐藤に子供の養育を頼むが、狐藤はすでに正体を知られたいまはそれも出来ず、新蔵に件の野狐玉（富貴玉）を授けて去るのである。

一篇はまず「弘師の火」の伝説から始まり大概は葛の葉狐の「信田妻」の伝説に拠ったものである。諸書によって「信田妻」は一樣ではないが、江戸時代半ば以後通念となったところを略記すると、

村上天皇の時代、和泉の信田の森で狐狩りで殺されようとした白狐を安倍保名が助ける。狐はその恩返しに詫び住いしている保名のとこに許嫁者葛の葉に化けて訪れ、夫婦の語らいをして男子を儲ける。六年後、事情あって会えずにいた実の葛の葉が訪ねて来ることを知った狐は、別れを悲しむ一首の歌を残して去る。狐の生んだ子は長じて陰陽の大家安倍清明である。

この「稲村新蔵弘師を討取事」でも「安倍の童子を生み育て信田の森へ帰る、

それは野かんよ是は蛇道世にふしぎなことも有る」と叙べているように狐を蛇に変えてのものであったが、結局は「白狐の玉」を出すべくここでも狐の登場を促さずにはおかなかった。

「信田妻」伝説を扱ったものはこれよりさきも怪異小説になかったわけでない。宝曆三年刊『古今実物語』にも「畜類人と契り男子を生む」(巻四)があった。摂津の阿部町あたりに住む陰陽師が天王寺の春の彼岸会の人出の中で美しい娘を見染め妻として一子を儲けた。その子が三才になった時、犬に吠えられたので驚いて外へ走り出た女房は、人に顔を見られてしまった。女房は内に入り襖に「恋しくはたづねてきませいづみなるしのだの森のうらみくすの葉」と書いて姿を消す。人々はさては狐の仕業であったかと驚いた。陰陽師は安倍保名に因み、書き残した歌も「信田妻」の伝説そのままのものであるが、狐が助けられそれにより報いる報恩説話としての要素がないばかりか「稻村新蔵弘師を討取事」の一篇がこれに比較していかに複雑な構成になっているか知るべきである。

さらに遡れば、寛延三年刊『怪談登志男』の「信田の白狐」(巻三)もそうであった。江戸神田の高松某が京大阪を廻って和泉の信田の森の神社を訪ねたが門を閉ざして参詣が許されない。折りしも美女に会いそのはからいで参詣がなかった。さてはその美女は信田の狐ではなかったかと再拜して帰ったとある。

いろいろ趣向を変えての信田狐であったが、「怪談」といっても、もはやその奇事異聞に頼るだけでは済ますことが出来なくなっていたのである。

六

「信田妻」の伝説は要するに安倍晴明の出生の秘密に結びついたものであるが、浄瑠璃の『芦屋道満大内鑑』(竹田出雲作・享保十九年・竹本座)はこれを最も人々に印象づけたものであった。『野狐名玉』は「乍懼口上」と浄瑠璃芝居もどきの体裁さえなした怪異小説であったが、この「稻村新蔵弘師を討取事」の叙述表現には明らかに浄瑠璃類似の表現が駆使されていたのである。

例を、いわゆる子別れの場面にとれば、

今日とゆふ今日仏神におつたてられて八百万の神々が、爰をされよ〜と黄給ふ。きやふこそかへろうとおもへども此みどり子を誰が世話してくれふぞ。かはひやとちぶさふくめよねんなくみだにむせて泣居けるぞあはれなり。若子もなくなく涙したにねさせてそばに有る硯箱引寄せてする墨も涙に投けて流れて海をこし、国家もながるゝ風情筆をもつ手もいとどなげきふる

われて障子をたからに取つてしどろもどろに書残すもしほ草おもひの数はおしれどなげきに筆もまわりかね。し心のたけをあらましにしめし参らせ候めでたくかしこと書置をしやうじに残し出んとすれど、おさな子に心ひかれて立帰ら又門に一走り出てはかけもどり、さぞぬしもんんぎさしやんしやう。晩からちちせがんでいぢりなばそのせわは誰がする。みな主しのなんぎととや心ひかざるゝ、とやせんかとやせんと思ふうち又もかへれと黄玉ふ。ノウおそろしや〜只今帰るとゆふひまに、表方へ風が持くる梅が香かほる驚のやどりきたのの稻村へ入くる姿にほひ香も高やかになりもかたちもわれに似てコハそもふしぎと見合顔ヤアおまへは春日のさんコリヤアアあじな所どふしぎのえん、そしておまへの母御白藤さんはおまめかアイしつての通りか〜さんはかすか野の普請ゆへ森をかへられて今は箱根山へ、そのとき私は此北の小浜へ嫁入、また姉さんは津の玉川のもりに残てござんすサア姉さんにはちこちこ〜逢ふたれども爰へ来てから逢もせず。

この叙述表現を見て『芦屋道満大内鑑』のこれまた「子別かれ段」をその文脈に見るなら一脈通じるところを認めるであらう。

思はずわつと泣く声に、保名一間を走り出で、仔細を聞いたり何故に童子を捨ててやるべきやと、呼ばはる声に莊司夫婦裏の葉も転び出で、放ちは速らじと取りつけば、抱きし童子をはたと捨て、形は消えて失せにける。莊司目をしばた〜きエエ探夢ばかり斯くと知つたらば、ふかふか尋ね来ずとも仕様もやう有るべきに、無慙の次第を見る事やと、夫婦が悔めば葛の葉も手持無沙汰に見えけるが、ア、さうぢや、なには兎もあれ斯くもあれ、自らが姿となり、自らが名をなのり、産んで貰ひし此の坊は、とりも直さぬ我が子なり、父様母様お前の為にも、真実の孫ぢやと思うて下さんせ。コレ坊、今から此の母が身にかへていとしがら。今までの母様の様に、母様〜としなつこしう頼むぞや、オ、好い子や。と抱き給へば、乳を探して、いや〜この母様はそでない、膝を這ひ下り見廻して、母様〜と呼びさけべば、保名堪へかね大声上げ、仮会野干の身なりとも、物の哀れを知ればこそ五年六年付き纏ひ、命の恩を報せずや沉んや子まで儲けし中、狐を妻に持ったりと、笑ふ人は笑ひもせよ。我は些とも恥かしからず、別るゝとも相対にて互に合点の其上は、失せもせよ消えもせよ、此の儘にては何時までも、放ちはやらじヤア葛の葉、童子が母よ女房よ。と間の襖を引き明ければ、向うの障子に一首の歌、恋しば尋ね来て見よいづみなる信太の森のうらみ葛のは、ハ

ア扱は一首の形見を残し、つれなうも帰りしな。我に名残は残らずとも童子は不便に思はずかと、奥にかけ入り表に出で、狂気の如くかけめぐれば、童子も父の跡につき、母様何処へいかしやつた、母様なうと、かつばと伏し声をはかりに足ずりし、身を悶え歎くにぞ、莊司夫婦葛の葉も、共に哀れに取り乱し、前後不覚に歎かるゝ。

共通した文脈そのものを問題にしているのではなく、その浄瑠璃の語りにも似た叙述をさぎの一篇に認めればよいのである。

七

この「稻村新蔵弘師を討取事」は二つのことで従来の「怪談」小説に見られないところがあった。ひとつは浄瑠璃もどきの叙述で通俗性を齎らしたこと。ひとつはそれによって短篇を専らとした「怪談」小説の長篇化をはかったことである。この長篇化は今後の怪異小説に必ずしもめずらしいことではなくるのである。やがて寛政期に入って、『怪談前席夜話』（寛政二年）五巻は一巻一話ずつ、『怪談夜半鐘』（寛政八年）も一巻一話ずつで全五巻。また『怪談旅の曙』（同年）は四巻で六話を収め、そして『怪談願草紙』（寛政九年）五巻はついに五巻ひと続きのものとなるのである。かくして読本の長篇化と呼応して怪異小説の長篇化へとすすむことになるが、その前哨的な意味で『名香富貴玉』のこの篇は評価されるべきである。

〔注1〕 拙著『近世怪異小説研究』（昭和五四年・笠間書院）

〔注2〕 浅野三平氏『近世中期小説の研究』（昭和五〇年 桜楓社）

〔注3〕 拙稿『静観房好阿の怪異小説』（国語国文研究・六八号 昭和五七年八月）

〔注4〕 水谷不倒氏『選択古書解題』（昭和二年 奥川書房 のち『水谷不倒著作集』中央公論社）に収録。

〔注5〕 『怪談記野狐名玉』の奥付は次のようである。

細工人作者 谷川琴生系
 明和九辰正月吉旦

大坂心斎橋南江式丁目角

書 仲屋彦太郎 版

京都御幸町御池下ル

林 夢屋孫兵衛 版

大坂御堂筋五町通南江入ル

和泉屋幸右衛門 版